



ILD-Report

楽習

gakushu



2014年 特別号

密着：採用1年目の先生方の授業研究



学ぶ意味を探る理由

生徒が学ばなければ意味がないということが、より一層強調されるようになったのは、なぜでしょうか。

妥協できない理由

体育科チームの事例を中心としながら、活動や目標の意味を妥協せずに掘り下げる過程を整理しました。

指導要領が重視される理由

革新的なアイデアで学習上の課題を打開し、意味のある授業を展開される先生は、指導要領や教科書をどのように活用しているのでしょうか。

学習指導案を 書き換える意味

京都市の中学校採用1年目研修(2014年度)を参観させていただきました。京都市は、経験年数が少ない先生方の育成に熱心だということで有名な都市です。京都市の採用1年目の夏季研修では、3日間それぞれの授業にひたすら向き合い続けます。

その過程で、先生方の中で何度も繰り返されていたのは、「なんのために？」という「学ぶ意味」の探求と、「意味あるものにする仕掛け」の模索でした。

「意味」は、実態と照らし合わせることによって明らかになるため、授業中もしくは再設計する過程が重要です。

しかし、そもそもなぜ「学ぶ意味」に迫る必要があったのでしょうか。また、3日間どのように「学ぶ意味」に迫っていったのでしょうか。「意味」に焦点をあてながら、以下、短く整理したいと思います。





意味を 探る

普段時間を費やすことが困難な授業研究。今回一つの授業にじっくり向き合う中で生じた素朴な疑問は、単元の永続的理解や教科の存在意義の問い直しにまで発展していきました。

なぜ“学ぶ意味”を探るのか 選ばれた体育科チームの事例

かつてさまざまな調査によって、経済格差による教育格差が明らかにされました。

その後、ICT 機器の発達によって、学習者を取り巻く環境が急激に変化しました。学ぶ力さえあれば、経済的な事情を乗り越えて、学ぶ機会を得ることができるようになりつつあります。

これに伴い、どのような場合においても自ら工夫して見通しをもったり、関連づけたりできるトレーニングが重視されるようになりました。

このような学習は、学習科学では「有意味学習」と呼ばれています(Ausubel & Robinson 1969 / 1984)。

この研修において、先生方が指導案を書き換えながら有意味学習の設計を目指す理由は、生徒が自ら学び続ける力を高めるために他なりません。

そして、学ぶ意味を多角的な視点から探るために採用された方法は、この研修の特徴の一つとも言える他教科の先生との授業研究でした。

ある学習集団は理科・国語・体育科の三チームで構成されていましたが、授業研究で選ばれたのは体育科の授業でした。

実技は、技能が備わっていることを示すことができるか・できないか、取り組んでいるか・いないかを視覚的に確認することはできますが、技能を発揮したり習得したりするプロセスに関する言語化が困難な場合もあります。

ところが、実技を苦手とする生徒も自分なりの目標をもって取り組む(=意味をもって学ぶ)ためには、自分あるいは他の人の技能の現状を判断する視点が言語化されている状態が求められます。また、そのような視点を自ら研究するための言語活動が重視されています。

参考文献: Ausubel, D. P., & Robinson, F. G. (1984). 教室学習の心理学(吉田彰宏・松田彌生 訳).名古屋: 黎明書房. (Original work published 1969)



妥協できない理由

自分一人だけの課題ではなくなる時

1日目に「改善し甲斐のある学習指導案」を選ぶ際には、中学3年生のバレーボールの授業が選ばれました。その理由は、言語活動を通じた思考の時間が確保されることによって、子どもが自ら目標を意識して動くようにする必要があったためでした。

2日目は、他教科の教員と授業 DVD で生徒の姿をみながら「ボールをどこまで・どのように打てたら合格なのか」「なぜそのように打たなければならないのか」など到達点を確認し、「どのようなことを考えると動きが変わるのか」についてアイデアを出し合いました。その結果、例えば声を出すことの意味を「自分たちの動きを撮った動画で確認しながら考える」「黙って行った場合と声を出して行った場合の違いを比較する」という活動を通して考え、意識して動くことができるようにするという改善案がうまれました。

3日目は、2日目のアイデアからヒントを得ながら、各々の学習指導案を改善しました。驚くべきことに、2日目に改善案を提案された授業者はアイデアを完全に暗記していました。改善案を作成していると、さらにお互いに思いつきや疑問が沸き上がり、自主的に度々会議が開かれました。その結果、生徒個々がアタックしたい気持ちに寄り添いつつ、チームとしての適切な動きの意味付けをさらに掘り下げていき、その視点に基づいて目標設定や指導観、発問がさらに修正されていきました。

一人の課題がみんなの課題になったとき、他の先生方も自分の課題として検討していくので、授業者ひとりを集中攻撃したり無理な要求をするという様子はみられませんでした。また同時に、みんなの課題になった以上、自分ひとりが「これでいいや」と妥協することもできなくなっていたため、授業・活動の意味をとことん掘り下げながら改善されていったのではないかと思います。

3日間のスケジュール

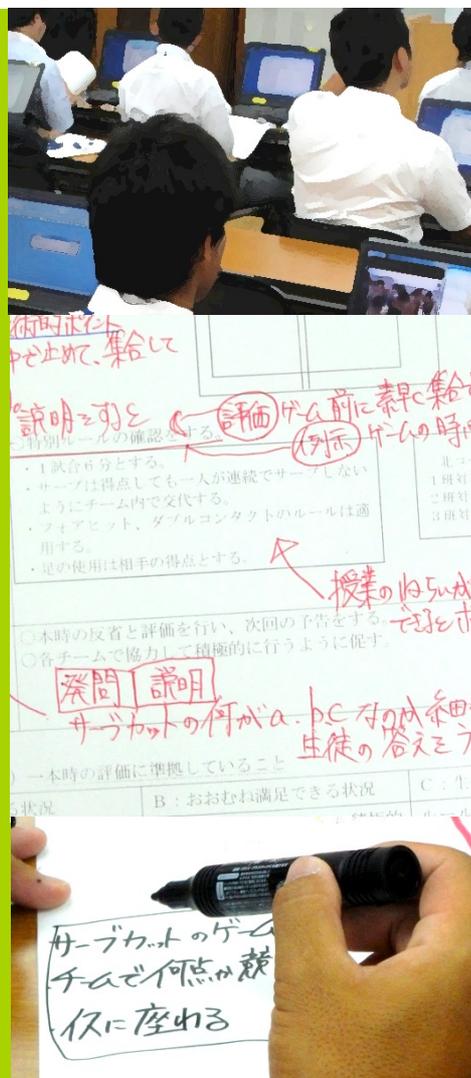
日	活動
1	DVD を見ながら自分の授業の記録をとり、最初の改善案を考える。これに基づきグループで最も改善し甲斐のある学習指導案を選ぶ。
2	他の教科のメンバーにもDVD を見ってもらって分析し、知恵を出し合う。
3	同じ教科のメンバーと改善案をさらに検討しながら学習指導案を書き換える。

指導要領にヒント？

この研修の1週間くらい前に、まだ10年目になっていない若い先生で、革新的な発想で学習上の課題を打開している先生に、「どうやったらそんなに色々思いつくんですか？」と聞いたら、「私は元々この教科について専門じゃなかったんです。ヒントは学習指導要領から得ています。」と回答されました。今回の研修の最終日に行われたパネルディスカッション(主事の先生方による対談)でも、「学習指導要領解説を読むとよいです。」と回答されました。

この発言の意味は、2日目のフリートークで、よくわかりました。チームメンバーから同じ質問をされた先生は、「まず教科書を読むんです。でもそこで得ることが、なぜ大事なのかをイメージすることができないんです。(中学生時代)授業が嫌いだったので、面白いと感じるように、食いつくにはどうしたらいいかを考えるんです。」と答えられました。

課題を解決するネタは、経験や実態に照らし合わせて、学習指導要領や教科書に込められた「学ぶ意味」を論理的かつ創造的に読み解く中で生まれる、ということなのですね。



ILD-Report 2014 extra

先生たちの専門を超えた学び合い

【 謝辞 】 京都市総合教育センターの皆様、参観させてくださった採用1年目の先生方にはこの場をお借りしてお礼申し上げます。大変お世話になり、ありがとうございました。



NPO 法人学習開発研究所は、たえず変動している社会にあってもますます多様化している学習者の実態に対応するための学習の開発を目指します。

教育実践結果を広く共有してくださる会員を募集するとともに、現在非会員のみなさまにも、ぜひ会員としてご支援頂けるよう、ご協力お願い致します。

特定非営利活動法人学習開発研究所

<http://www.u-manabi.org/>

〒612-8105

京都市伏見区東奉行町1番地 桃山グランドハイツ 714

TEL/FAX: 075-601-1423

e-mail: info@u-manabi.org